

## 北タイ・ムラブリ族の現状

著者	坂本 比奈子
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	39
ページ	293-294
発行年	2003-06-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00001923">http://doi.org/10.15021/00001923</a>

## 北タイ・ムラブリ族の現状

坂本 比奈子

北タイのプレー県のムラブリ族に始めて接してからまだ2年も経っていないのであるが、飛躍的な変化を現地で観察してきた。それは、ムラブリ族が2000年8月に国籍を取得したことによる。2001年2月に村に入って目に付いたのが、家々がきれいに立派になったこと、服装も見違えるほどこざっぱりときれいになっていた。ムラブリ族のシンボルであった、バナナの葉で屋根を葺いた差し掛けのような家はもう建てない。こぞってトタン屋根に変えている。国籍を取れば選挙権があるので、国会議員の立て看板が入ってくる。タイ人になったということで、いろいろな寄付がどっと入って来て、学校にはコンピュータが並んでいた。お金を使うことを知らなかった人たちが、現金収入があると他民族の村に行き堂々と買い物をして来る。運転免許を取った若者がいて、車で移動し始めていた。ラジオ、時計、懐中電灯が普及し、蓄電池を使った発電機まで流行していた。学校では、朝、国旗を掲揚し国歌を歌わなければならない。国王を敬い、仏を尊崇することが要求される。

このような変化の大波が押し寄せる中で、ムラブリ族の伝統的知識は記録されないまま消えようとしている。森の生活者であったムラブリ族の言語には植物名が豊富にあるが、従来の記録では、植物名とか、竹の一種とかというようなことで終わっていて、ほとんど同定できない。そのような記録では、記録としての価値がないのではないか。映像とか写真による記録を残すべきではないかと考えて、カメラマンに同行してもらい、実験的に、どういう風になるかなということをやってみた。その結果、映像や写真に撮っても、動植物名の同定ということは生易しいことではないことが分かった。最終的には動植物の専門家とカメラマンを動員するしかないようである。一般に、山地民は植物名に詳しく、学術的な区別以上に細かい名称を立てて区別しているといわれるが、その記録を残さないことは許されないであろう。

私のインフォーマントは25歳未満らしいが、幼児期は森の中で育った最後の年代で、植物名を初めとして森の知識を豊富に保持している。彼の知識があやふやにならないうちに記録しなければならない。それ以後の世代というのは、森の記憶がなくて、関心もなさそうである。しかし、森は今でもムラブリ族の憩いの場、あるいは神聖な場であるらしい。大木がほとんど伐採された森林は、動植物の数も少なくなり、狩猟採集といっても蜂の巣とりとか、山芋ほりぐらいしかなく、それもなかなか手に入らない。それでも建材の竹を切り出したり、紙の原料にする樹皮などは貴重な財源となっている。

話者人口300名足らずという小グループが今後どのように推移していくのか記録を残

すべきであると考えて、現在、プレーに定住しているグループについては、全員の戸籍と、親戚関係を調べることができた。ムラブリ族は生涯通じていくつもの名前を持つのがこれまでの習慣であったので、親戚関係の調査は非常に困難であった。また、婚姻関係については、彼らは人に明らかにすることを好まないので発表することは人権侵害になるおそれがある。写真についても、差別感情を刺激するようなものは公表を差し控える必要があるのではないだろうか。しかし、タイ側に先住民の権利保護という意識がない場合どうすべきか、厄介な問題である。

民族学的先行研究においては、ムラブリ族の婚姻形態は平行従兄弟婚だといわれているが、家系を辿るとほぼそうになっており、巧みに近親婚を避けていることが判明した。他県のグループも入れて、大人については、全員をどこのだれと認識していた。これは近親婚を避けるのに必要なことであろう。見たところでは、劣性遺伝による障害を持つ者は1人もいなかった。また、ムラブリ族は離婚と再婚を繰り返し、生涯現役であるから、一生の間に20人はこどもを作ることになる。それによって人口を維持してきたのであろう。

かつて他県にいたことが明らかになっている、30人足らずの小さなムラブリ族のグループについて、最後は他民族と結婚して消滅したということを知った。筆者の調査結果では、他民族と結婚した女性が1名だけあったが、結婚して出て行った者は不明であるので実態はわからない。今後このケースは増えるものと予想され、人口減少の引き金になるかも知れない。